

## 創立40周年記念式典・祝賀会を開催

ガラスびん3R促進協議会の創立40周年記念式典と祝賀会を11月19日(火)に如水会館(東京都千代田区)で開催し、正会員・賛助会員・来賓など140余名のご出席を賜りました。

記念式典では、当協議会 野口会長の挨拶をはじめに、経済産業省、環境省、農林水産省、国税庁からのご来賓の方々に、ご祝辞を頂戴しました。式典に続き、石川 雅紀 神戸大学名誉教授(叡啓大学特任教授)にご講演をいただきました。



会長挨拶

### 「リサイクル」から「3R」へ そして、「3R+リニューアブル」に向けて

ガラスびん3R促進協議会  
会長 野口 信吾



「ガラスびん3R促進協議会」の会長を仰せつかっております、東洋ガラス株式会社の野口でございます。

本日はご多忙にも拘らず、かくも多数の方のご出席を賜りまして誠にありがとうございます。また、長年に亘りまして当協議会の活動に多大なるご理解とご支援を賜り、重ねてお礼申し上げます。お陰を持ちまして、本日、事業開始から40周年を迎えることができました。これもひとえに皆様方のご厚情の賜物と、衷心より感謝申し上げます。

さて、当協議会の前身組織である「ガラスびんリサイクリング推進連合」は、1984年11月19日にガラスびんの効率的なリサイクルを推進するために必要な事業を行うことを目的に設立されました。当時はガラスびんの種類が多様化し、一般廃棄物として排出される量も増加傾向になり、リサイクルへの社会的な要請が拡大していました。

1995年に容器包装リサイクル法が公布されたことにより、ガラスびんのリサイクル推進事業は法律に基づく義務量の再商品化を行うなど、より一層実務的な業務内容へと転換が求められるようになりました。また、ガラスびん関連業界全体として、業界団体の機能の重複を避け、意志決定および業務遂行系統の一元化を図る必要がありました。このため、「ガラスびんリサイクリング推進連合」が従来行ってきた事業に加え、ガラスびんのリサイクルを一層効率的に推進するために必要な事業を広範に行い、併せて「公益財団法人日本容器包装リサイクル協会」を支援することにより、資源循環型社会の構築に寄与すること

を目的に、1996年11月19日に「ガラスびんリサイクル促進協議会」が設立されました。

その後、2014年11月19日、「ガラスびんリサイクリング推進連合」設立から30年を機に、ガラスびんは“リデュース・リユース・リサイクル”すべてに対応できる容器であることから、現在の名称である「ガラスびん3R促進協議会」に改称いたしました。

直近の10年間は、「持続可能な開発目標」であるSDGsの採択、EUのサーキュラーエコノミー政策パッケージの発表、海洋プラスチック汚染の顕在化、激甚化する自然災害など環境や経済を取り巻く状況は大きく変化いたしました。

この間、当協議会も未来を担う小学生向けの啓発やびんリユースシステムの環境優位性が見える化のための“びんリユースシステムLCA調査・分析”、自治体別1人当たりのガラスびん分別基準適合物引渡量とガラスびんの排出・収集・運搬等のアンケート集計結果とのクロス分析、好事例自治体の取材と情報提供、Eコマースと自治体回収システムを融合させた、新たなガラスびんリユースモデルを構築する実証事業、「再使用に配慮した1.8L壺自主ガイドライン」の策定などを行ってまいりました。

また、直近では米の籾殻や鶏卵の卵殻などのバイオマス廃棄物をアップサイクルしたガラス原料化の事例も紹介し、ガラスびんの「3R+リニューアブル」の可能性をお伝えしています。

今後も、サステナブルな未来のために、ガラスびんの「3R+リニューアブル」の促進に取り組む所存でございます。今後とも旧に倍するご支援・ご指導を賜りますようお願い申し上げます。



式典に出席いただいたご来賓の方々から  
祝辞を頂戴いたしました。



経済産業省  
イノベーション・環境局  
GXグループ 資源循環経済課  
課長補佐 岡田 時房氏

平素より当省の資源循環経済政策に対するご理解、ご協力を賜りまして誠にありがとうございます。ガラスびん3R促進協議会関係者のみなさまにおかれましては、創立40周年を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。

貴協議会は1984年の設立以来、ガラスびんの3Rについて広報・啓発活動に取り組んでこられ、資源の有効利用、資源循環経済の促進に大きく寄与されました。2023年にはガラスびんのリサイクル率が75%を達成しており、計測を開始した2004年の59.3%から着実に向上していること、また容器包装リサイクル法制定時から存在するびんリユースのシステムが今なお機能していることについては、貴協議会を始めとしてガラスびん業界のみなさまの啓発活動と継続的なガラスびん資源循環に資する取り組みの賜物と存じております。



国税庁  
酒税課  
課長 三浦 隆氏

本日はガラスびん3R促進協議会が40周年を迎えられましたことに心よりお祝いを申し上げます。

ガラスびんは酒類の容器として長い歴史を持ち、そのリユースやリサイクルが着実に進められてきました。従来からのビールびんや一升びんの適切な洗浄・再使用の実施はもとより、リターナブルびんの規格統一びんの開発・導入など普及拡大の取り組みなどが行われています。また、リデュースにおいてガラスびんの軽量化や破損防止のための形状・材質改良など、環境負荷の削減に向けた技術革新も進められています。こうした取り組みは、運搬コストの削減に大きく寄与しているものと考えています。

国民の皆さまは環境への意識、省エネ、リサイクルに対する関心が高まっており、循環型社会の構築を目指して貴協議会および業界全体での3Rのさらなる推進への取り組みを期待します。国税庁では引き続き、容器包装リサイクル法などの環境法令の周知・啓発、酒類業者や消費者の方々への3Rの取り組みの周知・啓発に努めてまいります。



環境省  
環境再生・資源循環局  
総務課 容器包装・プラスチック資源循環室  
室長 井上 雄祐氏

ガラスびん3R促進協議会の40周年、誠におめでとうございます。この40年間で、ガラスびんリサイクルの定着に大きな足跡を築かれ、今日では全国1,700の各自治体で分別を行うことが当たり前になっている状況は、ひとえに協議会の皆様のご努力のおかげと感謝申し上げます。

政府では第五次循環基本計画を今年度策定し、ガラスびんも含めた容器包装においてシングルユースに関し、さらなる3R・資源循環について強化を図る方針を掲げています。

サーキュラーエコノミー（循環経済）において、とくにシングルユースプラスチック、シングルユースの使い捨てについての風当たりが強くなっております。これらプラスチック問題への受け皿としても、ガラスびんでの100%循環させる経済へ向けての取り組みが大変重要であり、さらに飛躍を期待し、政府としてもご支援できればと考えております。



経済産業省  
製造産業局 生活製品課  
企画官 伊藤 裕美氏

ガラスびん3R促進協議会40周年、心よりお祝い申し上げます。

ガラスびんは長い歴史の中、ずっと私たちの暮らしを支え続けてくれている有益で環境優位性が特長である容器です。食品における流通・物流の延長線にある容器の廃棄問題にも、3Rを推進することで資源を節約して環境にやさしい流通・物流が実現できると考えております。ガラスびんの3Rにおいては、貴協議会はプラットフォームの役割を長きに渡り果たしてこられました。また、ガラスびんメーカー、ボトラー、カレット商、びん商の皆さまが業界の垣根を越えた取り組みを推進されていることに大きな意義があると承知しております。

今後、ガラスびん業界の発展には、軽量化のための製造技術の精度を高めることが重要です。リサイクル認知度向上については、リサイクル識別表示マークの制定に向けた検討は重要です。

環境にやさしいガラスびんは今後も大いに注目されると見込まれます。ガラスびんリサイクルでは、新たな製品・加工法の開発への取り組みを期待し、経済産業省としても一緒に考えながらサポートしたいと思います。



農林水産省  
大臣官房 新事業・食品産業部  
外食・食文化課 食品ロス・リサイクル対策室  
室長 鈴木 学氏

創立40周年おめでとうございます。サーキュラーエコノミーにおいて、農林水産省としてはガラスびんを食品との関連で注目しております。食品では、安全・安心や品質の維持が重要であり、ガラスびんは保存性と安全性、衛生性に優れています。ガラスびんの3Rを推進されている貴協議会の活動に敬意を表します。

ガラスびんは長い歴史があり、二オイを吸着しない、リユースでき、水平リサイクルしやすい特長を持っている注目に値する容器ですが、さらにバイオマス廃棄物のガラス原料化などの新しい技術も開発されています。

このようなガラスびんは、食品ロス削減においてひじょうに重要であり、消費者の方々への啓発・広報の促進に、農林水産省として支援していきたいと思っております。





# 演題 ネットゼロ社会でのガラスびん



## 来るべき2050年の社会に向けては、 ネットゼロで考える

日本は2050年までに温室効果ガス(以下、GHG)排出量を実質ゼロをすることを目標としており、3R(リデュース・リユース・リサイクル)や廃棄物処理でもGHG排出量の削減を考えなければなりません。その際には、スコープ1(事業者自らによる直接排出)、スコープ2(他社から排出された電気、熱、蒸気の使用での間接排出)、スコープ3(スコープ1、2以外の間接排出/事業者の活動に関する他社の排出)というカテゴリーで考える必要があります。

ネットゼロとカーボンニュートラルは同じような意味合いで使われていますが、異なります。ネットゼロがスコープ1、2、3を対象としているのに対し、カーボンニュートラルはスコープ1、2だけを対象としています。また、オフセットの方法にも違いがあります。2050年までにGHG排出量を実質ゼロにするにはスコープ3までを対象にしないと不完全であり、パリ協定の「1.5°C目標」にも整合しません。(表1参照)

表1

ネットゼロ目標	カーボンニュートラル目標
<ul style="list-style-type: none"> <li>●スコープ1,2,3</li> <li>●1.5°C目標と整合的</li> <li>●GHG排出量を物理的に取り除く活動でオフセット</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●スコープ1,2</li> <li>●1.5°C目標と整合性問わない</li> <li>●GHG排出量を削減・吸収でオフセット</li> </ul>

## 2050年のネットゼロ社会では、 リターナブルびんにチャンス

ガラスびんの3Rについて考えてみましょう。リデュースは軽量化ですが、ガラスびんはすでに軽量化が進んでいて、特にビールのリターナブルびんは見た目にも薄く、実際に持ってみてもかなり軽くなっています。かつて開発された企業からは、軽量薄肉化しても従来びんと同等の強度があるとの説明を受け、驚いたことを覚えています。2050年の目標までにびんの軽量化はさらに推進すべきであり、消費者側の願望を述べるなら、今より半分くらいの重さで割れにくい、リユースできるびんをつくってほしいと思います。

リユースはガラスびんの最も得意とするところです。再充填びん、いわゆるリターナブルびんです。日本の業務用びんビールはリターナ

ブルびんで回っており、これまでのLCAの研究結果では、同じ容量の他素材の容器と比べ、ライフサイクルでのGHG排出量はかなり少ないことが判明しています。(表2参照)

しかし、家庭用ではいろんな要因があってリターナブルびんの数量が減少してきたがゆえに、システムを昔のように再構築しようとしても難しいと思います。ただし、2050年の社会は現在の社会と根本的なところで変わっていないといけません。そういう意味ではチャンスはあると思っています。

リサイクルは、貴協議会が発足以降、推進してきた経緯があり、その昔はカレット利用率が25~30%で推移していましたが、最近では75%くらいまでに達しています。しかし、カレットリサイクルは、他素材のリサイクルよりも多量のGHGを排出するため、2050年の社会では他のシステムへの移行を想定せざるを得ないのではないかと思います。

表2

素材別 1本当たりのCO <sub>2</sub> 排出量	
●飲料容器のLCI分析(2002~2004年)	
リターナブルびん(ビール)	0.06525kg-CO <sub>2</sub> /500ml
ワンウェイびん(清涼飲料)	0.22283kg-CO <sub>2</sub> /350ml
PETボトル(炭酸清涼飲料)	0.12863kg-CO <sub>2</sub> /500ml
紙パック(屋根型アルミなし)	0.04720kg-CO <sub>2</sub> /1000ml

容器包装ライフ・サイクル・アセスメントに係る調査事業 報告書(環境省)

## リユースはサプライチェーンのイノベーションと 消費者側のライフスタイルの変化を想定

リデュースは軽量化を徹底する。リユースはサプライチェーンのイノベーションと消費者側のライフスタイルもかなり変化することを想定しながらうまくフィットすることを考える必要があります。カレットリサイクルの懸念は、カーボンプライシング\*1化で経済的に成り立つかということです。そういう意味ではリターナブルびんのシステムに期待を抱いています。

サプライチェーンには上流があって下流があり、ワンウェイであり、リニアエコノミー\*2です。それでは2050年のネットゼロ社会でもリユースシステムは成立しないでしょう。サプライ・コレクションチェーン\*3であるべきではと考えます。自社がつくった製品を消費者に販売し、消費者が使用後に自治体や他の関与者に渡して終わりというのではうまくいかないというのが私の直感です。メーカーとして社会に製品を供給し、回収して再使用や再生利用すると考えると製品設計自体が変わってきます。ワンウェイとはまったく違う製品設計でなければいけません。さらにリユースの場合、販売の出口である小売店に戻すということもありえます。

たとえば、日本にはこの何十年間ですく整備されたものとして資源物の分別収集があり、20世帯に1箇所くらいの割合で回収ステーションがあります。回収手段としての利便性を確保するためにスーパーマーケットやコンビニエンスストアなどの小売店には協力していただきたいと思っています。もちろん消費者のみなさんの協力も必要です。

\*1:企業や個人が排出する二酸化炭素に価格をつけることで、排出削減を促す政策手法  
\*2:直線型経済。資源を採掘し、製品をつくり、使用後に廃棄するという一方通行型の経済システム  
\*3:製品のライフサイクル全体を考慮し、使用後の製品の回収やリサイクルも含めた循環型の供給網



神戸市出身。東京大学工学部化学工学科卒業、工学博士。神戸大学大学院経済学研究科で環境経済学を担当し、経済産業省、環境省、農林水産省などの審議会委員を歴任。現在、神戸大学名誉教授、叡啓大学特任教授。NPO法人ごみじゃぱん代表理事を務める。研究テーマは循環経済学、自主的アプローチ、環境政策における参加型アプローチ、拡大生産者責任など。

## サプライ・コレクションチェーンで ネット通販でのリユースシステム構築も

ガラスびんのサプライ・コレクションチェーンを考えると、事業系は日本ではビールびんのリユースシステムが成立していますが、一升びんについては課題もあります。

また現在では、自宅で使う飲料などはネット通販で購入する機会が増えていますが、結果としてたくさんの段ボールが残る状態で、典型的なワンウェイビジネスとなっています。通販業者にも対応できる打開策を考えていただきたいと思います。例えば、ケースで購入する飲料は段ボールではなくプラスチックのコンテナで届き、ネット通販事業者に空容器をコンテナごと回収してもらう。このような逆流通といった形は、ロジスティクス面で大変でコストアップにもなると思いますが、もし社会にフィットする形で構築できれば、昔、行っていたようなびんリユースシステムは成立します。同時にガラスびんの場合はリユースシステムが機能していて、今までもビジネスとして取り組まれている事業者が各地におられます。その事業者と行政とが連携するなどすれば、ネット通販でのリユースシステムの構築も可能だと思っています。

## カーボンプライシングのインパクトは、 容器選択に影響を

2050年のネットゼロ社会では間違いなくカーボンプライスが掛かります。すべての人が負担をするものであり、CO<sub>2</sub>を多く排出する特定の事業者だけが負担すればいいという訳ではありません。カーボンプライスを支払えばいくらかCO<sub>2</sub>を排出してもいいとなるとエネルギー利用では膨大な費用となります。

では、一体どれだけお金が掛かるのか。国際的なレポートでは、1ドル=150円で換算すると、2019年の価格で1トン当たり約150,000円から約450,000円となります。2050年では電力はすべてGHG排出量ゼロになっていると思いますので、節電してもカーボンプライスは節約できません。

LCI分析の容器ごとのCO<sub>2</sub>排出量を基に電力を使ってもCO<sub>2</sub>はライフサイクルでは出ないという前提でカーボンプライスを計算すると、ワンウェイのガラスびんが一番高く、次がPETボトル

### カーボンプライスはいくらかかるか？

●CO<sub>2</sub> 排出量 1トン当たり  
1,000 ~ 3,000 US\$/t-C (2019年基準) #1,#2  
#1: NGFS Climate Scenarios #2: IEA, Net Zero by 2050

●素材別 1本当たり	
リターナブルびん (ビール)	2.67円~8.02円/500ml
ワンウェイびん (清涼飲料)	9.12円~27.4円/350ml
PETボトル (炭酸清涼飲料)	5.26円~15.8円/500ml
紙パック (屋根型アルミなし)	1.93円~5.80円/1000ml

1\$=150円、1ton-CO<sub>2</sub>=0.273ton-Cで換算、データが古いことへの注意が必要  
金属缶は350mlで評価してPETボトル500mlと同程度

トルです(表3参照)。この価格は容器価格に匹敵する額ではないかと思っています。ただし、製品価格では清涼飲料水が1本100数十円ですからカーボンプライスは1割程度の額となります。

消費者の選択には味覚の嗜好や容器の利便性が大きく影響し、リターナブルびんかワンウェイ容器かの選択は消費者のライフスタイルによるため、家庭系ではインパクトは限定的だと思います。一方、業務系は製品価格に敏感なため、容器価格に匹敵するカーボンプライスの違いは大きなインパクトとなります。つまり、リターナブルびんが優位に立っているのは業務系ということになります。

また、ワンウェイ容器は今の価格と比べて倍に上がっていて、リターナブルびんがそれほど上がらなければ、飲料メーカーの容器選択にも関わってきます。

## ネットゼロ社会でのリサイクルは、 カレット溶解のエネルギー源が課題

今後、ネットゼロ社会へ向かう上では、動脈企業はスコープ3に当たる廃棄・リサイクルをどうするか、また静脈企業や自治体はきちんと回収できるのか、ということがテーマになります。

3Rを進めるとなると、他素材の容器包装は軽量化してリサイクルするという手段しかありません。しかし、ガラスびんの場合は、軽量化してもリサイクルではカレットを溶かすことになるため、天然資源と比べて大きな省エネルギーになりません。3割くらいの省エネルギーはできますが、逆にいうと7割はやはり使わなくてはならない。毎回、7割のエネルギーを使うとなると、そのエネルギー源が問題になってきます。カーボンニュートラルやネットゼロ社会だと、エネルギーそのものの価格が相当上がっています。カレットリサイクルは価格的に厳しくなるのではないかというのが一番の課題だと思います。

## 「今ない日常生活」をつくり、 新たなシステムで新しい社会に転換

リユースはCO<sub>2</sub>排出量が少ないので、価格だけ見ればカーボンプライスのインパクトは逆に優位になりますが、回収率を高くすることが重要です。リユースで回収率を上げるには、リユースシステムをつくってしまえば回収率は上がります。大事なのは日常生活にいかに組み込むかです。「今ない日常生活」をつくらなければいけません。では、一体、誰がどうつくるのでしょうか。

これは個人的な意見ですが、カレットリサイクルが2050年時点で期待が持たずに、リユースを推進されていることを考えると、現在よりさらにびんの生産量が減少しているはずで、リターナブルびんは価値が高いですが、それは100%回収するのが前提です。割れたびんをカレットにするというのでは、CO<sub>2</sub>を発生させることになってしまいますから好ましくありません。

びんの生産量自体は大幅に減っているという前提で、新しい社会への転換が必要だとすると、それを主導するのはブランド

P4、オーナーになります。未来に向けたリユースシステムや家庭系の資源物を回収できる新たなシステムが必要となります。これは大きなビジネスチャンスでもあります。その状況をご存じなのは容器メーカーや素材メーカーです。先を見据えてぜひチャレンジしていただきたいと思います。

循環型社会では、私たちの日常生活はこのように大きく変化していくと思います。日常の買い物行動と資源物排出行動、それは消費者にとっても使って捨てて終わり、ということではありません。買ったものは戻す習慣を生活導線として日常の中に組み込むべきです(表4参照)。

表4

循環型社会での日常生活
● 日常の買い物行動と資源排出行動のバランス
● 製品選択時に排出後を意識する
● 日常動線に資源排出行動を位置づける
● ごみ収集を最小化する

資源循環もずいぶんと変化しているはずですが、マテリアルリサイクルならばメーカー主導の使用済み製品の回収と水平リサイクル、プラスチックだったらケミカルリサイクル。そして循環型の宅配やシェアリング、マッチングという形が大事になってくるでしょう。

まとめとして

現在の社会は、資源物の分別収集によるリサイクルの促進はすでに限界にきていると思っています。今後、世帯構成も高齢世帯や独居世帯が増加し、ライフスタイルに合わせた循環政策の準備が必要となります。そこではガラスびんのリユースシステムが進化していくことが重要なポイントです。リユースは社会の変化から考えて大きなビジネスチャンスだと思います。これを誰がどのように始めるか。それがただいまの課題だと思います。2050年に向けて長期的な視点でガラスびん業界がイノベーションを進めることが不可欠です。

創立40周年記念式典後、祝賀会が盛大に行われました。



野口会長の挨拶、小笠原副会長から乾杯の発声で祝賀会がスタート。会場では、40年の歩みをスライドショー上映しました。



祝賀会会場の様子



小笠原副会長の乾杯の発声



40年の歩みスライド上映

記念式典が行われた後、会場を移し、祝賀会を催しました。当協議会野口会長の挨拶のあと、祝賀会に出席いただいたご来賓者のご紹介を行い、小笠原副会長の乾杯の発声でスタートしました。

祝賀会には、農林水産省、環境省、大学、業界関連団体をはじめ、びんメーカー、ボトラー、びん商、カレット商などの当協議会の正会員・賛助会員など多数の方にお集まりいただき、ご歓談いただきました。また会場に設置されたスクリーンでは、当協議会の「40年の歩み」をまとめたスライド並びに、「びん to びんリサイクル」と「サステナブルな未来に役立つガラスびん3R」のムービーを上映し賑やかな宴となりました。



田中事務局長の中締め挨拶

お帰りの際にオリジナルラベルの「ルームフレグランスボトル」の記念品と、全面改訂し改称した小冊子「ガラスびんの3R BOOK」をお渡ししました。



記念品のルームフレグランスと小冊子

ガラスびん3R促進協議会 40周年記念式典 WGメンバー (敬称略 五十音順)

- |                   |                            |                                  |
|-------------------|----------------------------|----------------------------------|
| 大越 壯一郎 東洋ガラス株式会社  | 中田 美緒子 アサヒグループジャパン株式会社     | 渡邊 隼人 コカ・コーラ ボトラーズジャパン株式会社 (事務局) |
| 加藤 精一郎 石塚硝子株式会社   | 仁科 久美 サッポロビール株式会社          | 窪田 仁志 株式会社ニュー・シンク                |
| 金子 竜也 硝和ガラス株式会社   | 松澤 嘉継 三栄ガラス株式会社            | 田中 希幸 ガラスびん3R促進協議会 理事・事務局長       |
| 櫻田 健太 株式会社 山一商会   | 湯澤 一人 日本山村硝子株式会社           | 福浪 基文 ガラスびん3R促進協議会               |
| 佐野川 剛 サッポロビール株式会社 | 吉川 貴大 全国びん商連合会 (株式会社 吉川商店) |                                  |

# ガラスびんの「リサイクル」から「3R」へ。そして、「3R+Renewable」に向けて

## 40年の歩み 1984年度(昭和59年)～2024年度(令和6年)



発足時のロゴとマーク



あきびんポスト



絵本



リサイクルマニュアル



びんランドのきかんしゃ



設立



ホームページ開設



びんのリサイクル通信



ガラスびん3R作戦パンフ



リターナブルびんナビ開設



キッズサイトリニューアル



ガラスびんBOOK制作

### 1984年度(昭和59年)

- 「ガラスびんリサイクル推進連合」発足
- 「あきびんポストによる回収実験」を実施
- 「ニュースリサイクル」週1回発行

### 1985年度(昭和60年)

- 絵本「うまれかわった りさ」を作成

### 1988年度(昭和63年)

- 「ガラスびんの文化誌」を発刊

### 1991年度(平成3年)

- 「ガラスびんリサイクルマニュアル」を作成

### 1992年度(平成4年)

- PRビデオ「びんランドのきかんしゃ」を制作
- カレット用途開発アイデア募集を実施

### 1993年度(平成5年)

- パンフレット「ガラスびんリサイクル」を制作

## 1994年度(平成6年) 10周年

- 「ガラスびん推進プロジェクト」(略称RAMプロジェクト)発足

### 1996年度(平成8年)

- 「ガラスびんリサイクル促進協議会」設立
- ガラスびんのリサイクル・リユース情報を一元化するためのトータルフローシステムを導入
- パンフレット「容器包装リサイクル法とガラスびんの再商品化」制作

### 1997年度(平成9年)

- カレット品質向上のパンフレットを制作

### 1998年度(平成10年)

- 多用途利用のPR活動を実施

### 2000年度(平成12年)

- 促進協議会のホームページ開設

### 2002年度(平成14年)

- 小学生向けミニパンフレット「はじめ!の一本」を制作

### 2003年度(平成15年)

- 「びんのリサイクル通信」年3回発行
- 南九州地域における900ml 茶びんの統一リユースモデル事業に参画
- 「エコプロダクツ展」に当協議会ブース出展

## 2004年度(平成16年) 20周年

### 2005年度(平成17年)

- 「3R推進団体連絡会」結成

### 2006年度(平成18年)

- ガラスびん3R推進のための「第1次自主行動計画」策定・公表

### 2007年度(平成19年)

- 自治体に向けて化粧品びんリサイクルの啓発を開始
- 小学生向けのDVD「ガラスびん3R作戦 ペンギン南極へ帰る」を制作

### 2008年度(平成20年)

- 小学生向けパンフレット「ガラスびん3R作戦」を制作

### 2009年度(平成21年)

- 事務局を新宿区百人町に移転
- リターナブルびんポータルサイト「リターナブルびんナビ」を開設
- Webサイトのキッズサイトをリニューアル
- 総合パンフレット「ガラスびんBOOK」を制作

### 2010年度(平成22年)

- 広報誌を「びんの3R通信」に改称
- 「ガラスびんリサイクル・ポスターコンクール」を開催

### 2011年度(平成23年)

- びんリユース推進全国協議会 設立

- ガラスびん3R推進のための「第2次自主行動計画」策定・公表

### 2012年度(平成24年)

- 大和茶「と、わ(ToWA)」のデザインコンペティションに協賛



びんの3R通信に改称



組織名を改称



小学生向け3R冊子制作



Webサイトリニューアル



びん to びんリサイクル公開



LCA調査・分析を実施



SDGsの取り組み策定・公開



Web「びん助の3R探検」公開



エコプロ出展ブースリニューアル



小学生向け3RとSDGs冊子



ガラスびん3R BOOK



3R+リニューアブル発信

## 2014年度(平成26年) 30周年

- 創立30周年記念式典開催
- 創立30周年記念誌を制作
- 組織名を「ガラスびん3R促進協議会」に改称

### 2015年度(平成27年)

- Webサイトに新たにコンテンツを追加
- 小学生向け「ガラスびんで学ぶ3R(小学生向け教材)」を制作
- びんリサイクルのムービーを制作し、WebサイトとYouTubeで公開

### 2016年度(平成28年)

- ガラスびん3R推進のための「第3次自主行動計画」策定・公表
- Webサイトをリニューアル、スマートフォンに対応
- 小学生を対象とした、びんリユースミニパンフレットを制作

### 2017年度(平成29年)

- 輸入びん実態調査を実施

### 2018年度(平成30年)

- Webサイトのリニューアルに着手

### 2019年度(平成31年)

- ガラスびんBOOKを一部改訂

### 2020年度(令和2年)

- 「びん to びんリサイクル」新ムービーを公開
- 小学生向けフリーペーパー「エコチル」記事掲載開始
- リターナブルびんの LCA 調査・分析を実施、結果報告会を開催
- びんの3R通信vol.50を特別記念号発行、デザインを一新
- びんリユースフォーラム開催【びんリユース推進全国協議会】
- エコプロ 2020に Online 出展

### 2021年度(令和3年)

- ガラスびん3R推進のための「第4次自主行動計画」策定・公表
- 「ガラスびんの3RにおけるSDGsの取り組み」を策定・公開
- びんリユースシンポジウム2021の開催【びんリユース推進全国協議会】
- Web「びん助の3R探検」オープン!
- エコプロ出展ブースをレンタルパネルとインフォグラフィック仕様に

### 2022年度(令和4年)

- Eコマースと自治体回収システムを融合させた実証事業を開始【日本ガラスびん協会連携】
- 「再使用に配慮した1.8L壺自主ガイドライン」を策定【1.8L壺再利用事業者協議会】
- びんリユースシンポジウム2022開催【びんリユース推進全国協議会】
- 輸入びん実態調査を実施
- 「ガラスびんの3RとSDGsを学ぼう!」パンフレット制作

### 2023年度(令和5年)

- 「サステナブルな未来に役立つガラスびん3R」新規ムービー公開
- 修学旅行中高生向けセミナー開始
- 「リユース工程視察研修会」「リサイクル工程視察研修会」開催
- 「びんリユース地域交流会in大阪」開催【びんリユース推進全国協議会】

## 2024年度(令和6年) 40周年

- 「統一規格びん推進委員会」設立
- Webサイト「ガラスびんの魅力」をリニューアル
- 創立40周年記念式典開催
- 「ガラスびんBOOK」を全面改訂し、「ガラスびん3R BOOK」に改称
- Webサイトメインページを「3R+リニューアブル」として発信

